

病害虫発生予察情報(6月予報)

令和元年5月29日
静岡県病害虫防除所長

1. 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち	発生量：少 (発病株率0.45%)	前年8月葉いもち発生量： 少(発生なし)(-) 前年9月穂いもち発生量： 少(発生なし)(-) 置き苗いもち：発生なし(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(-)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：やや少 (発病株率0.05%)	前年8月の縞葉枯病の発生量： 少(発生なし)(-) 5月上中旬のヒメトビウンカの発生量 ：水田畦畔：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	イネミズゾウムシ	発生量：やや少 (寄生株率8.8%)	前年6月発生量：少(-) 5月の予察灯誘殺数：少(誘殺なし)(-) 気象予報：気温：高い(+)
	イネドロオイムシ	発生量：やや少 (東部高冷地：寄生株率11.4%)	前年6月発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや少	5月上中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
ジャガイモ	疫病	発生量：少	5月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：並～少ない(-)
	ジャガイモガ	発生量：やや多	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
ウンシュウミカン	チャノキイロ アザミウマ	発生時期： 昨年より3～11日遅い 発生量：やや少 (発生果率0.4%)	5月中下旬発生量(茶)：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(±)
	ヤノネカイガラムシ	発生時期：並 発生量：やや少 (寄生葉率0.09%)	5月中旬発生量：少(-)(発生なし) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率8.4%)	5月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(+)
中晩柑類	かいよう病	発病度(葉)：並 (発病度0.5)	5月中旬新梢発生量： やや少(-)一部で多 気象予報：気温：高い(+) 降水量：並～少ない(-)

ナシ	黒星病	発生量：並	5月下旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（-）
カキ	落葉病	発生量：やや多	前年9月発生量：多（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（-）
	チャノキイロ アザミウマ	発生時期： 昨年より3～11日遅い 発生量：やや少 (寄生果率0.1%)	5月中下旬発生量(茶)：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
	フジコナ カイガラムシ	発生量：やや少 (7月寄生果率1.2%)	5月下旬発生量：少（-）（発生なし） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（+）
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや少	5月中下旬発生量：やや少ない（-） 気象予報：気温：高い（-） 降水量：並～少ない（-）
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや多	5月中下旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
チャ	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 3.5 葉/1.25m ²)	5月中下旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（-）
	もち病	発生量：少 (病葉数 7.4 葉/1.25m ²)	5月中下旬発生量：少（-）一部で多 気象予報：気温：高い（±） 降水量：並～少ない（-）
	輪斑病	発生量：並 (病葉数 2.0 葉/1.25m ²)	5月中下旬発生量：少（-）（発生なし） 気象予報：気温：高い（+）
	カンザワハダニ	発生量：多 (寄生葉率 1.3%)	5月中下旬発生量：多（+） 天敵（カブリダニ類）：少（+） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 15.9 頭/4 か所)	5月中下旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 2.6 頭/4 か所)	5月中下旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
	チャノホソガ	発生量：やや少 (巻葉数 5.9 葉/1.25 m ²)	5月中下旬発生量：少（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（±）
キク (施設)	白さび病	発生量：少	5月下旬発生量：少（発生なし）（-） 気象予報：気温：高い（-） 降水量：並～少ない（-）
	黒斑・褐斑病	発生量：少	5月下旬発生量：少（発生なし）（-） 気象予報：気温：高い（+） 降水量：並～少ない（-）
	えそ病 (トマト黄化えそ ウイルス: T SWV)	発生量：やや少	5月下旬発生量： えそ病：少（発生なし）（-） 気象予報：気温：高い（+）

キク (施設)	アザミウマ類	発生量：やや多	5月下旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：やや少	5月下旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(+)
	オオタバコガ	発生量：並	トラップ誘殺量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報は
こちらで
検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2. 予報の根拠と防除対策

【イネ】

＜生育の概況等＞

生育は地域によってばらつきがある。夜温が低いいため生育が遅れている地域がある。

●いもち病(葉いもち)

予報の根拠

- ・ 昨年8月の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年 1.30%）。また、昨年9月の巡回調査では穂いもちの発生は確認されなかった（平年発病株率 0.40%）。
- ・ 5月上中旬の巡回調査では置き苗に葉いもちの発生は確認されなかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温が高く、降水量も並～少ないため、発生を特には助長しない（いもち病の発病好適条件は気温 15℃～25℃、葉面の 10 時間以上の湿潤状態）。

防除対策

- ・ 置き苗は本田に植え付けた株よりも早期に葉いもちが発生し伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・ 常発ほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・ 本県では MBI-D 剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病害虫防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

予報の根拠

- ・ 前年8月の巡回調査では、縞葉枯病の発生は認められなかった（平年発病株率 0.6%）。
- ・ 5月上中旬のヒメトビウンカの発生は、水田畦畔雑草では認められなかった（30回すくい取り平均捕獲数：平年 0.02 頭）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は並～少ないため、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。イネが本病に感染しやすい幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。
- ・ ヒメトビウンカはコムギ収穫後に水田に侵入するため、コムギ栽培ほ場の近隣の水田では6月中下旬に本田防除を実施する。
- ・ 発生地域の発生時期に当たる作付では、縞葉枯病抵抗性品種（あいちのかおり SBL）を利用する。

●イネミズゾウムシ

予報の根拠

- ・前年6月の巡回調査では、イネミズゾウムシの平均被害株率は5.9%（平成8.8%）と平成より少なかった。
- ・各地の予察灯における5月上中旬の成虫誘殺は確認されていない（平成0.0～0.6頭／半旬）。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、薬剤を散布する。

●イネドロオイムシ(イネクビホソハムシ)

予報の根拠

- ・前年6月の巡回調査では、東部高冷地におけるイネドロオイムシの被害は認められなかった（平成被害株率13.9%）。
- ・例年、6月以降は幼虫による食害が増加する。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、幼虫が発生する6月中下旬に薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類

予報の根拠

- ・5月上中旬の畦畔等の雑草におけるカメムシ類の発生は平成より少なかった（30回すくい取り平均捕獲数1.6頭：平成3.4頭）。
- ・1ヶ月予報では、気温は平成よりも高く、降水量は並～少ないため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまうので、出穂10日前には除草を終了する。

<その他の病害虫>

●ニカメイガ

- ・前年9月の被害は平成より多かった（平均被害株率0.8%：平成0.3%）。
- ・5月中旬時点の予察灯およびフェロモントラップ誘殺数は平成より少なく推移している。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

- ・前年7月の巡回調査では、スクミリンゴガイの平均発生面積率は33%（平成33%）と平成並であった。
- ・移植後2～3週間は食害を抑制するため、浅水管理（4cm以下）に努める。
- ・発生地域の普通期水田では移植後の薬剤処理を実施する。
- ・6月中旬～7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【ジャガイモ】

＜生育の概況等＞

生育は平年並である。

●疫病

予報の根拠

- ・ 5月中旬の巡回調査では、発生はみられなかった（平年発病株率 10.8%）。また、巡回調査ほ場における疫病と思われる症状の株を顕微鏡観察及び分離培養したが、疫病菌は確認されなかった。これは巡回調査以前に、薬剤散布が行われ、本病原菌が死滅したためと思われる。
- ・ 疫病菌の病原菌は多湿を好み、水媒伝染するため、気温が 20℃前後で降雨や曇天が続く時に多発する。
- ・ 1ヶ月予報では、降水量は平年並～少なく、気温は平年より高いため、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 疫病対策を主体とした防除を行う。
- ・ 疫病の発生が確認されたほ場では、直ちに薬剤散布を行う。また、周辺ほ場で多発している場合など、感染源が多いと予想されるほ場でも、薬剤を予防的に散布する。
- ・ 発病株や罹病残渣は伝染源となるので、圃場外へ持ち出して焼却処分する。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・ 5月中旬に行った巡回調査では、平均被害株率は 0.4%（平年 0.1%）と平年並であった。
- ・ 1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・ 例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・ イモは露出しないよう土寄せをして産卵を防ぐ。掘り取ったイモは産卵防止のため覆いをかけ、刈り取った茎葉などと離し、早めに屋内に搬入して覆いをする。
- ・ イモの残渣は発生源となるのでほ場に残さない。

【ウンシュウミカン】

＜生育の概況等＞

生育は平年並の地域が多い。着花量は平年並～やや少ない。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・ チャの巡回調査における発生量は平年より少なかった。1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、6月のミカン園における発生量は平年よりやや少ないと予想される。
- ・ アメダス気象データを用いた予測によると、5月27日以降の気温が平年並で推移した場合、第2世代成虫の発生時期は6月9日～18日で、発生時期は昨年に比べて3～11日遅いと予想される。各産地における発生時期の予想は、病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・各世代の飛来ピーク時期の1週間前から飛来ピーク時までが薬剤防除適期である。飛来ピークは年次や産地によって異なるので、病虫害防除所ホームページの情報を参考にして防除を行う。
- ・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。
- ・炭酸カルシウム微粉末剤25倍を6月上旬と7月中旬に計2回散布することによって、6月から8月にかけて、チャノキイロアザミウマを対象に化学殺虫剤を3～4回散布したのとほぼ同等の防除効果が得られる。

●ヤノネカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月の巡回調査では寄生は見られなかった（年平均寄生葉率0.03%）。
- ・県予察ほ場（静岡市清水区茂畑 標高約200m）では1齢幼虫の初発日は5月20日であった。防除適期の2齢幼虫最多発生時期は6月下旬と予想されるが、標高約100mより低い産地ではこれより1週間程度早くなる。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・天敵により本種の発生が少ない園では防除を行わなくても良いが、発生の見られる園では2齢幼虫最多発生時期に薬剤散布する。
- ・6月中旬～下旬の薬剤散布は枝や葉に対する寄生の防止と次世代の発生量を少なくする効果がある。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・5月の巡回調査では平均寄生葉率は1.0%（平年3.0%）と平年より少ない発生であった。
- ・1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・最近土着天敵の利用により6月の防除を省くほ場が多い。ただし、寄生葉率が30%を超えるほ場では、寄生密度を下げるために薬剤による防除を行う。

<その他の病虫害>

●黒点病

防除対策

- ・第1回目の防除は6月上～中旬、第2回目の防除は散布間隔25～30日又は累積降水量250～300mmを目安に行う。各産地における第2回目の防除適期の予想は、病虫害防除所ホームページを参照（6月以降随時更新）。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 5月中旬の巡回調査では、新葉での発病度は0.17（平年値0.04）であるが、一部の多発園を除くとやや少ない発生であった。
- ・ 病原菌は、旧葉に形成された病斑から降雨の際に雨滴とともに飛散し伝搬し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。
- ・ 1ヶ月予報では、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 新梢に発病が見られるほ場では、降雨前に銅水和剤または抗生物質の散布を行う。なお、銅水和剤の散布では薬害を防ぐため炭酸カルシウム剤（200倍）を加用する。

【ハウスミカン】

<その他の病害虫>

●ミカンキイロアザミウマ

防除対策

- ・ 着色期の発生に注意し、初期防除に努めるとともにハウス内外の除草を徹底する。また開口部（側窓、天窗）に防虫網または遮光ネットを張り、本種のハウス内への侵入を防ぐ。

【ナシ】

<生育の概況等>

生育は平年並～3日程度早い。着果量は地域により異なり、平年よりやや多い～やや少ない。

●黒星病

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、発病果率は0.4%（平年値0.1%）で平年並であった。ただし、発生は一部の園地に限られている。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・ 耐性菌の発生を抑えるため保護殺菌剤による予防散布に重点を置き、DMI剤（アンビル、インダー、オーシャイン、スコア、トリフミン、マネージ）は連用を避ける。

<その他の病害虫>

●黒斑病

防除対策

- ・幸水、豊水、静喜水は抵抗性品種で防除の必要はない。新水、喜水は罹病性品種で発病しやすいため、防除を行う。
- ・6～7月が発病まん延期であり、降雨状況に合わせて防除を行う。

【カキ】

<生育の概況等>

生育状況は地域により異なり、平年並及び平年より4～7日遅い地域がある。

●落葉病

予報の根拠

- ・昨年9月の巡回調査では、平均発病葉率は17.1%（平年1.7%）で平年より多かった。
- ・主感染時期の5月上旬～7月上旬に降雨が多いと発生が多い。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、本病の発生をあまり助長しない。

防除対策

- ・本病は罹病した落葉が主要伝染源で、5～7月に感染し、60～120日の潜伏期間後発病する。8月以降の散布では殆ど効果がないので、5～7月の降雨前に予防散布を行う。
- ・また、本病は根が障害を受けやすいほ場で、肥料不足、長雨などにより樹勢の弱った木に発生しやすい。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・チャの巡回調査における発生量は平年より少なかった。1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、6月のカキ園における発生量は平年よりやや少ないと予想される。
- ・アメダス気象データを用いた予測によると、5月27日以降の気温が平年並で推移した場合、第2世代成虫の発生時期は6月9日～18日で、発生時期は昨年に比べて3～11日遅いと予想される。各産地における発生時期の予想は、病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・本種は開花期から7月まで飛来、加害する。初期防除が重要で、開花初期から花弁落下期までの防除を徹底する。

●フジヨナカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月下旬に行った巡回調査では、果実には発生は見られなかった（平年寄生果率0.2%）。
- ・1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、本種の増殖を助長する。
- ・アメダス気象データを用いた予測によると、5月23日以降の気温が平年並で推移した場合、西部地域における防除時期となる1、2齢幼虫発生ピークは6月9日～22日となる。

防除対策

- ・例年この時期の発生は少ないが、7月以降に果実のへた部等で寄生がみられる。
- ・昨年発生が見られた園では発生に注意し、6月中旬の第1世代の若齢幼虫の発生時期に防除を行う。第2世代と第3世代では様々な齢期の個体が混在する上、生息場所である果実とへたの隙間が果実の肥大によって狭くなり薬剤が到達しにくくなることから、防除効果が高まりにくい。

<その他の病害虫>

●ハダニ類

防除対策

- ・カキに対する寄生性は低いですが、5～6月に下草を除草したり、周辺茶園の刈込が行われるとカキの樹上に移動して加害を行う。葉の硬化とともにカキでの発生は見られなくなる。
- ・うどんこ病の初期病斑と紛らわしいが、展葉直後の若葉に黒点を生じる。多発すると落葉することもあるが、多くの場合は実質的な被害はない。果実も加害を受ける場合があり、隆起した黒点を生じ、重傷の場合は症状が残る。多発している園地では殺ダニ剤を散布する。

【キウイフルーツ】

<生育の概況等>

生育は平年並～3日程度早い。

●かいよう病

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、発病葉率は3.4%（平年値なし）であった。
- ・本病の発病適温は10℃～20℃であるが、6月も病原菌は風雨により飛散し気孔や傷口から感染する。
- ・降水量は平年並～少なく、気温は平年より高いため、本病の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。そのため防除は予防対策が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防散布をする。なお、使用する薬剤によっては薬害を生ずる時期なのでコサイド3000を使用し、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・管理作業によっても感染するため、せん定器具はこまめに消毒する。
- ・キウイフルーツは風で傷害を受けやすいため、防風対策を徹底する。

【果樹全般】

●カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

予報の根拠

- ・5月中旬に行ったカンキツの花での叩き落とし調査では、平均寄生虫数は1.4頭/5着花枝（平年寄生虫数1.5頭/5着花枝）と平年並であった。

- ・ 冬季に行った落葉中のチャバネアオカメムシ越冬量調査では、越冬成虫は1.5頭/m²（平年越冬虫数1.0頭/m²）と平年よりやや多かった。
- ・ 県内6カ所に設置しているフェロモントラップにおける5月1日～20日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが42.8頭/箇所（平年53.7頭）で、平年よりやや少ない発生であった。ツヤアオカメムシが36.1頭/箇所（平年28.0頭）で、平年よりやや多い発生であった。県全体としてはこれら2種を含めたカメムシ類の発生量は平年並であったが、東部及び中部地域では平年より多かった。

防除対策

- ・ 例年ウメ、モモ、ビワは収穫期まで被害果が発生する。カンキツ、カキ、ナシ、キウイでは本格的なカメムシの被害は7月以降になる。
- ・ 果樹園では、ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。
- ・ 本年のチャバネアオカメムシ越冬数、フェロモントラップ・予察灯誘殺数の詳細は病害虫防除所ホームページに掲載している。

【チャ】

<生育の概況等>

5月中下旬の巡回調査時では、一番茶の摘採は終了していた。

防除員からの報告では、一番茶の摘採時期は平年並～10日遅い状況である。

●炭疽病

予報の根拠

- ・ 5月中下旬の巡回調査では、0.10葉/1.25m²（平年1.72葉/1.25m²）の発生で、平年より少なかった。これは、調査時が一番茶摘採終了後～二番茶生育初期であったために、たとえ感染していても症状が出る前の状態の葉が多かったためと考えられる。
- ・ 感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1ヶ月予報では、気温は平年より高いが、降水量が平年並～少ないため、発生は特には助長されない。

防除対策

- ・ 降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨期となる6月は感染機会が多くなる。例年、発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し2回目に治療剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・ 5月中下旬の巡回調査では、2.92葉/1.25m²（平年1.17葉/1.25m²）の発生であり平年より多かったが、これは、川根地区の1ほ場で多かったために平均値が押し上げられた結果であり、この1ほ場を除いた平均値は0.44葉/1.25m²と平年より少なかった。
- ・ 新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1ヶ月予報では、気温が高く降水量は平年並～少ないため、発生は特には助長されない。

防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では発生しやすい。潜伏期間が10日程度と短いため、二番茶摘採期の頃に発生する。例年発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し2回目に治療剤を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、発生は認められなかった（平年病葉数0.06葉/1.25㎡）。
- ・発病は25℃以上の高い気温が好適である。1ヶ月予報では、気温は平年より高いため、本病の発生を助長する。なお、本病の発生に降雨の多寡は関係しない。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口から発病が始まるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は7.8%（平年3.3%）と、平年に比べ多かった。また、天敵のカブリダニ類の叩き落とし虫数は0.6頭/4カ所（平年1.3頭）と平年より少なかった。
- ・例年、6月の発生は天敵のカブリダニ類により抑制される。
- ・1ヶ月予報では気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・天敵の活動等により6月は5月に比べ発生は少なくなるが、降雨が少なく乾燥すると発生が多くなる恐れがある。現在、発生が多い茶園では早めに防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.6頭/4カ所（平年8.7頭/4カ所）と、平年より少なかった。
- ・例年、二番茶生育期から発生が増加する。1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・二番茶以降の新芽萌芽から開葉期にかけて防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加する場合があるので、発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.7頭/4カ所（平年1.4頭/4カ所）と平年よりやや少なかった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、発生を助長する。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加すると被害が大きくなるので、発生状況に注意し再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・5月中下旬の巡回調査では、平均巻葉数は0.1葉/1.25㎡（平年1.4葉/1.25㎡）と平年より少なかった。
- ・県内各地のフェロモントラップへの誘殺時期は平年並～やや遅い。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並～少ないため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・幼虫の発生が新芽生育期に合致すると被害が大きくなるので、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお、成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。

<その他の病虫害>

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

防除対策

- ・茶業研究センターからの報告では、両種の発生量は平年よりやや多い。また、次世代発蛾最盛日は、有効積算温度による予測では6月第4～5半旬と推測され、ほぼ平年並と考えられる。このため、成虫に活性のある殺虫剤で防除する場合は、発生に注意し、6月第5～6半旬を目安に散布する。

●ナガチャコガネ

防除対策

- ・成虫は年1回6月頃に発生するので、成虫発生初期(6月上中旬)に被害が出た場所とその周辺部を対象として薬剤を処理する。
- ・成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。

●チャトゲコナジラミ

防除対策

- ・現在、卵～1齢幼虫が発生しており、防除適期は6月初旬頃までと考えられる。
- ・薬剤防除を実施する前に裾部の葉を強めに刈り落とし、薬液が葉裏にかかるようていねいに散布する。

【キク(施設)】

<生育の概況等>

生育は平年並の状況である。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量も平年並～少ないため、発生を特には助長しない（本病の発病適温 17℃前後）。

防除対策

- ・ 発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年並～少ないため、発生を特には助長しない（本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- ・ 土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・ 親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

●えそ病(トマト黄化えそウイルス:TSWV)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、発病は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は並～少ないため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下）を設置し、アザミウマ類の侵入を抑制する。

●アザミウマ類(クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、平均被害株率は19.0%であった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は並～少ないため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 定植後の初期防除に努める。
- ・ 親株は発生源となる可能性があるため、採穂後は親株をほ場に放置せず、速やかに処分する。
- ・ 施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・ ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の侵入源となるため、ほ場周辺の除草を行う。

●ハモグリバエ類(マメハモグリバエ)

予報の根拠

- ・ 5月下旬の巡回調査では、被害は確認されなかった（平年値なし）。
- ・ 夏期はハモグリバエ類の天敵（寄生蜂）の活動により密度が抑制されやすい。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は並～少ないため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 葉に1mm程度の白い斑点（産卵痕及び摂食痕）が多数見られる場合は薬剤散布を実施する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・ 浜松市のキク産地におけるフェロモントラップによる発生調査では、オオタバコガの発生量は平年よりやや少なく推移している（オオタバコガの誘殺消長は病害虫防除所ホームページを参照）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は並～少ないため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 例年7月以降に幼虫の発生が増加するが、6月から芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

(1) 1か月予報（東海地方 令和元年5月23日 名古屋地方气象台発表）

【予報期間】 5月25日から6月24日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。期間の前半は、天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率50%です。3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	1 0	3 0	6 0
1 か月	降水量	4 0	4 0	2 0
1 か月	日照時間	2 0	4 0	4 0
1 週目	気温	1 0	1 0	8 0
2 週目	気温	2 0	3 0	5 0
3～4 週目	気温	2 0	4 0	4 0

【予報の対象期間】

- 1 か月 : 5月25日(土)～6月24日(月)
- 1 週目 : 5月25日(土)～5月31日(金)
- 2 週目 : 6月1日(土)～6月7日(金)
- 3～4 週目 : 6月8日(土)～6月21日(金)

(2) 3か月予報 (東海地方 令和元年5月24日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 6月から8月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

この期間の降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

6月 平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

7月 平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

8月 平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。

【気 温】

3か月			6月			7月			8月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
3 0	3 0	4 0	2 0	3 0	5 0	4 0	3 0	3 0	4 0	3 0	3 0

【降水量】

3か月			6月			7月			8月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
2 0	4 0	4 0	4 0	4 0	2 0	2 0	4 0	4 0	2 0	4 0	4 0

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	6月	7月	8月	2月	3月	4月
浜松	22.1	25.8	27.5	241	190	151
静岡	22.0	25.7	27.0	293	278	251
三島	21.9	25.6	26.8	228	213	209

*1981年～2010年の平均

*降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--